

P1-22.**腰椎椎間板ヘルニアと腰部脊柱管狭窄症の脊椎矢状面アライメント**

(大学院二年・整形外科学)

○康 玉鵬

(整形外科学)

遠藤 健司、江川誠一郎、亀岡 尊史

鈴木 秀和、小林 浩人、田中 英俊

山本 謙吾

【目的】 腰椎変性性疾患の病態を明らかにするため、腰椎椎間板ヘルニア (LDH) と腰部脊柱管狭窄症 (LCS) の脊椎矢状面アライメントについて定量的評価を行う。

【対象と方法】 対象は LDH 66 例 (男性 39 例女性 27 例; 平均年齢 30 歳) と LCS 93 例 (男性 61 例女性 32 例; 平均年齢 67 歳) で、神経根型が 40 例、馬尾型が 53 例であった。脊椎矢状面アライメントの評価は、立位全脊柱の側面像を撮影し Jackson の計測法により C7 plum line から仙骨後方隅角までの距離 (JB)、腰椎前彎角 (LLA)、LIS1 角 (LIS1)、骨盤傾斜角 (PA) について計測した。

【結果と考察】 脊椎矢状面アライメントについて、LDH では JB 30.2 ± 49 mm、LLA 22.7 ± 12.8 度、PA 25.6 ± 9.6 度、LSA 28.5 ± 8.8 度であった。LCS 馬尾型では JB 57.6 ± 37.5 mm、LLA 18.8 ± 13.2 度、PA 27.2 ± 8.3 度、LSA 28.6 ± 10.4 度であった。LCS 神経根型では JB 40.3 ± 42.3 mm、LLA 22.4 ± 14.0 度、PA 22.7 ± 7.2 度、LSA 30.3 ± 6.3 度であった。LCS 群と LDH 群の年齢差は平均 37 歳差であった。JB について LCS 馬尾型は LCS 神経根型と LDH に比較して両群より有意に大きかった。LCS 神経根型と LDH 群には有意差がなかった。これらの結果より、馬尾症状は神経根症状より、JB が大きくなることが示唆された。しかし、腰椎前彎、骨盤傾斜については各群で有意差を認めなかった。LDH と LCS は発生年齢に差があるものの、LCS 神経根型の腰椎アライメントは LDH と類似しており、LCS 馬尾型は LDH に比べて、体幹前傾を呈する傾向があった。

P1-23.**PCBM と PRP で再建した下顎骨構造の CT 値による評価**

(専攻生・口腔外科学)

○有坂 隆一

(口腔外科学)

松尾 朗、加藤乃梨子、高橋 英俊

豊田 潤、北条 了、千葉 博茂

【目的】 PCBM+PRP+トレーによる顎骨再建は有力な再建法の1つで、近年注目を浴びつつある。しかし再建後の骨構造の変化について、形態学・組織学的検討はほとんどされていない。

今回われわれは、PCBM+PRP+トレーにより下顎骨を再建した後、インプラント (人工歯根) を埋入した骨の構造変化について、CT を用いて再建骨の皮質骨、海綿骨それぞれの形態変化を明らかにした上 CT 値で検討し、インプラント埋入の可能性についても検討した。また、既存骨にインプラントを埋入した症例も CT により同様に評価し、比較検討した。

【材料と方法】 東京医科大学病院口腔外科で PCBM+PRP+トレーを用いて顎骨再建や歯槽骨の増生を行った後、インプラントを埋入した 6 例と既存骨にインプラントを埋入した 11 例について、コンピュータソフトウェア (SIM/PLANT) を用いて形態学的に観察するとともに、皮質骨と海綿骨を含む領域と海綿骨部に限定した 2 つの領域の CT 値の変化を検討し、それぞれのインプラントの生着率を評価した。

【結果】 PCBM 再建群では全体的に皮質骨が薄く、再建部が 3 cm 以上の群では CT 値の平均は PCBM 再建群 259.7、皮質骨+海綿骨 360.2 であった。一方、既存骨の海綿骨 CT 平均値は 528. で、皮質骨を含めると 629.1 であった。したがって、PCBM 再建群は既存骨より有意に CT 値が低かった。ただし、再建部が 3 cm 未満では有意差を認めなかった。また、インプラントの生着率は PCBM 再建群 100%、既存骨群 94.1% で、両者の間に有意差は認められなかった。

【結論】 PCBM 再建骨は既存骨に比較して皮質骨が薄く海綿骨の CT 値が低いものの、インプラントの埋入は可能であった。